

N K H

長岡市立科学博物館報

No.65 1994





長岡市西部に見られる露頭

長岡市西部の丘陵地域では大規模な造成工事が相次いで行なわれており、あちらこちらに露頭ができています。

表紙写真は高頭町の道路造成現場のもので、見事な階段状の断層が見られます。

写真1は長岡ニュータウンの道路造成現場です。ここでは厚さ約100mの地層に今から80万年ほど前に起こった海水準の大きな変動の記録が残されています。写真2で上下を分ける境界は、海水準が上昇するときに波が地層を削ってできた境界面です。ラビンメント面と呼ばれています。写真3に見られるのはハンモック状斜交層理です。水深数十メートルくらいの水底でできたものです。



N K H

65号

1994年3月

目 次

雪のカーテン

.....	地学研究室 加藤 正明	1
信濃川河辺の稀産植物	植物研究室 西山 邦夫	2
長岡市のカミキリムシ覚え書	昆蟲研究室 山屋 茂人	3
悠久山サギコロニーのシラサギ類	動物研究室 渡辺 央	4
考古研究室だより 一平成5年度—	考古研究室 小熊 博史	5
歴史研究室閑話	歴史研究室 広井 造	6
長岡の下駄職人	民俗研究室 山崎 進	7
平成5年度事業報告		8

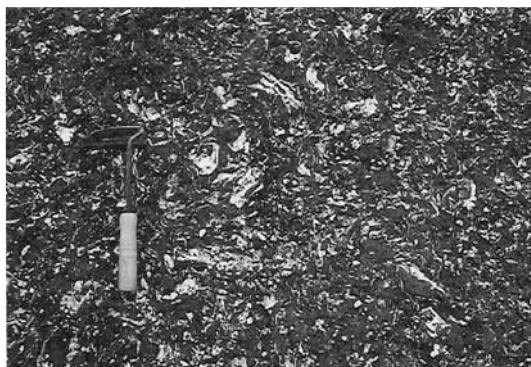


写真4は、この近くにある別の露頭で、カキの化石が密集しています。当時は内湾的な環境だったことを物語っています。

これらの露頭は工事の進展に伴って大半が失われる運命にあり、現在多くの地質研究家が協力して調査にあたっています。
(写真:古川正巳・加藤正明)

雪のカーテン

地学研究室 加藤正明

長岡に降る雪の特徴のひとつは、それが“湿った雪”であることだという。この湿った雪は我々の生活に様々な弊害をもたらすが、時として美しくも不思議な雪の世界へと誘ってくれる。ここに紹介する写真は、自動車の後部窓に積った雪が滑り落ちていく様子を連続的に捉えた写真である。

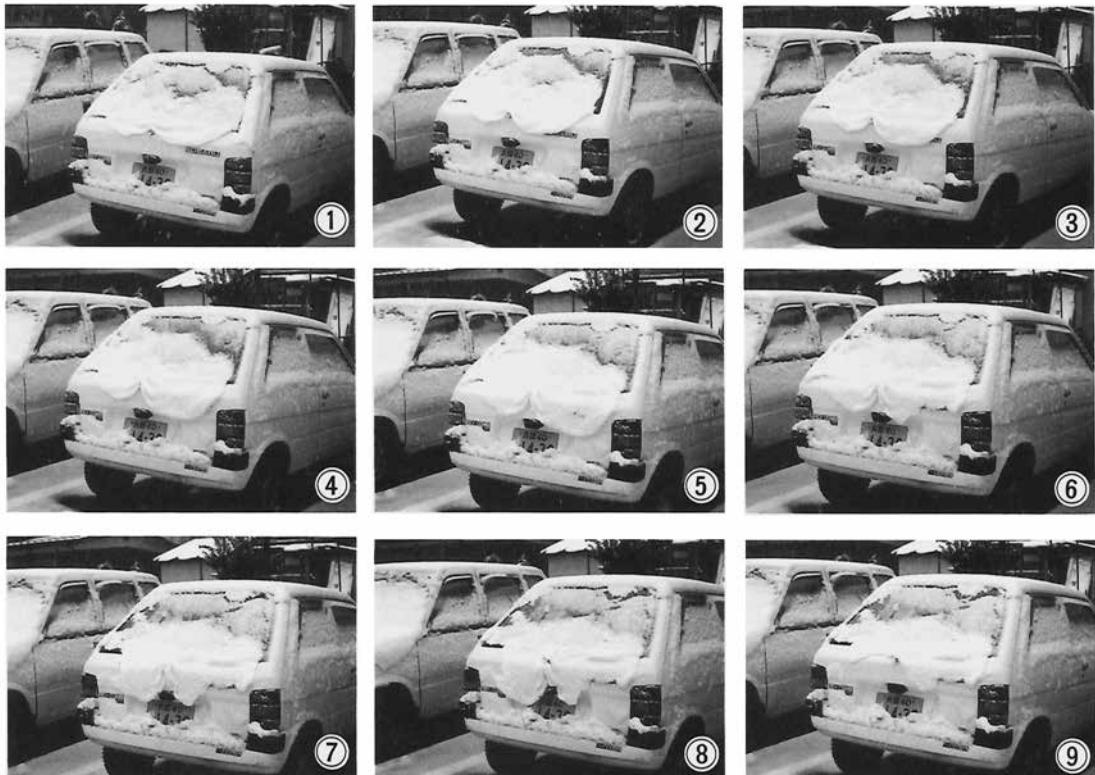
1986年12月26日、博物館の駐車場に降りしきる雪を研究室から眺めていたら、おもしろい光景が目に入った。そこに駐車していた軽自動車の後部窓に薄く積った雪が中央部から滑り出し始め、やがて鍵穴の突起に行く手を阻まれたのである。すると滑り落ちの中心は左右二手に分かれ、それと同時にそこから鍵穴の突起部分にかけて

“しわ”ができ始めた（写真1）。これはおもしろいと思って、あわててカメラを持ち出して撮影したが、雪は徐々にしわを増大させながら尚も滑り続け、しばらくすると自重を支え切れなくなってしまった（写真2～9）。それはまるで一枚の布が静かに滑り落ちていくようであ

り、また窓辺に引かれた白いレースのカーテンを見る思いであった。

ただ、なぜか最初のうちは向って右側の方の滑り落ちる量が多かったことが不思議に思えた。そこで滑り落ちている雪を手で払い除けて初期状態に戻し、もう一度最初から観察してみた。写真で紹介する余裕はないが、結果はやはり向って右側の方の滑り落ちる量が多かった。どうやら窓の周囲に巡らされたHゴムを乗り越えられない部分が左端にあるためのようであった。そこで、その幅と滑り落ちの量を測っておこうと思い研究室へ物差を取りに戻ったが、残念なことにそのわずかの間にこの軽自動車は何処へか走り去ってしまった。

いずれまたチャンスがあるだろうと思っているが、最近は軽自動車が高級化してリアワイパーが付けられるようになると共に、居住性の向上のためか後部の傾斜が急になり、この現象がなかなか見られなくなってしまったのは残念である。



信濃川河辺の稀産植物

植物研究室 西 山 邦 夫

信濃川は、甲斐、武藏、信濃の三国境の甲武信岳（2,475m）を源に長野県を千曲川となって流れ下り、新潟県に入って信濃川と呼ばれ日本海に注ぐ延長367kmの日本一大河である。

ここでは、長野県境から新潟市の河口に至る約150kmの河辺でみられる分布上顯著な植物を取り上げ紹介する。

1. ヤシヤゼンマイ *Osmunda lancea* Thunb.

ゼンマイ科

北海道南部、本州、四国、九州の山地の水辺にややまことに分布する多年草。信濃川では津南町長野県境の宮野原橋下流左岸、足滝集落の上郷橋下流左岸の段丘崖裾の岩盤上に生育する。県内では他に、東蒲原郡鹿瀬町の阿賀野川の河辺が知られている。

2. ツルドクダミ *Pleuropteris multiflorus* Turcz.

たで科

中国原産の多年草で、1720年頃薬用として輸入され、各地に野生化しており、特に東京周辺に多いといふ。

根茎は地中を横走し、ときに肥大した塊状根を作り、これを何首鳥（カシュウ）と呼び強壮剤として用いる。

信濃川では小千谷市の旭橋付近の堤防に生育する。

3. イタドリ *Reynoutria japonica* Houtt.

たで科

北海道の南部、本州、四国、九州、台湾、朝鮮半島、中国大陆に分布する雌雄異株の多年草。

県内低地に広く分布する種はケイタドリで葉の裏面の脈上や茎に毛状の突起が著しい。イタドリはこの突起がなく県内では稀産である。飯豊山、越後三山、巻機山、谷川連峰、苗場山、妙高高原笹ヶ峰、雨飾山など高海拔の県境沿いの山岳に分布する。低海拔地の分布は珍らしく、岩船郡山北町（5m）、上越市（20m）で知られている。信濃川では小千谷市時島河辺の半安定帶の砂礫地や、十日町市の姿大橋下流の砂礫地に生育しており、支流の魚野川では六日町・湯沢町域で見られる。

4. ウマノスズクサ *Aristolochia debilis* Sieb. et Zucc.

うまのすずくさ科

奥羽地方以南の本州、四国、九州、琉球、中国の野原に生えるつる性の多年草で、果実の様子が昔馬の首にかけた鈴の形に似ていることからその名がある。

県内でも、かつて平野部に広く見られたが、開発などで生育地が狭められ稀産となった。

信濃川では小千谷市真皿河辺の堤防で見られる。

5. ムシリマンテマ *Silene antirrhina* L.

なでしこ科

中～南アメリカ原産の帰化植物で、花枝の一部から粘液を分泌する1～2年草で日本では最初に長野県に帰化したといふ。上流の長野県から流水で運ばれてきたものか、信濃川では津南町の上郷橋上手左岸の堤防に生育している。

6. タコノアシ *Penthorum chinense* Pursh

べんけいそう科

関東以西、四国、九州の泥湿地に生える。

本種はレッドデーターブック（1989）で絶滅危惧種に挙げられており、河川敷、湖岸の改修工事によって生育地が狭められている。

県内の分布は主に阿賀野川、信濃川沿いで、長岡市、与板町域、魚野川では大和町域の水の溜る水湿地にわざかに生育する。

7. コシジタビラコ *Trigonotis brevipes* Maxim. var. *coronata* Ohwi.

むらさき科

ミズタビラコの変種で、近畿、北陸の山地渓谷の水辺に生える多年草。県内では津南地方にやや密に分布し、信濃川河辺では中里村船渡本村集落の半安定帶に生育する。

8. モリアザミ *Cirsium dipsacolepis* Matsum.

きく科

本州、四国、九州の平地の草原に生える多年草。根は太く径2cm程で食用として栽培される。信濃川では、津南町中津川合流点付近と下流の中里村船渡本村集落の右岸半安定帶に生育する。

9. コウボウ *Hierochloe odorata* P. Beauvo. var. *pubescens* Krylov.

いね科

北海道、本州、四国、九州、千島、樺太、朝鮮、シベリアなどの北半球の温帯に分布する多年草。県内では稀産で、信濃川では小千谷市真皿河辺の半安定帶の砂礫地に群生する。

10. エゾノサヤヌカグサ *Eeersia oryzoides* Swartz

いね科

サヤヌカグサの母種で、小穂は丸みがあり剛毛が著しい。

北海道、本州、四国、九州の水辺や湿地に生える。県内での分布は少なく、信濃川では長岡市の長生橋下流左岸の湿地に群生する。

長岡市のカミキリムシ覚え書

昆虫研究室 山屋茂人

カミキリムシはスマートな体型、長い触角そして昼間活動種では色彩が美しいことなどから、昆虫の中でも愛好者の多いグループで、全国的に見ても最も分布像が判明している昆虫の一つである。また、森林環境と強い結び付きを示す種群（ハナカミキリ亜科：山屋，1984；など）も知られており、この科に関する詳細な分布調査は生物地理学的な関心ばかりではなく、自然保護などの応用的側面に対しても、今後さらに利用価値の高い情報をもたらすと考えられる。

私は先に長岡のカミキリムシ科を総括した（山屋・片桐，1985）が、本稿ではその後新たに分布が確認された種を紹介するとともに、新知見を述べ、今後の資料に供したい。

新たに確認された種

1. アカネトラカミキリ *Brachyclytus singularis* Kraatz

lex., 柿町柿川上流、19.V.1985、松崎大二

ヤマブドウを寄主とする種で、前胸が明るい赤色を呈する美麗種であるが、早春に材から羽脱するものらしく、県内の既知産地は少ない。一般に中山帶で、ミズキなどの花上に見かけることが多いが、本稿の記録は低山帶で得られていることから、標高の観点から興味深い。

2. クビアカトラカミキリ *Xylotrechus rufilius* Bates

lex., 長岡市亀崎町桜峠の近く、19.VII.1992、須藤弘之
本種は北海道、本州、四国、九州、対馬に分布し、国外では朝鮮半島、中国、サハリンからも知られ、本科の中でも広域に分布する種の一つである。しかし、本州での産地は極限され連続的なものではなく、新潟県内からも県北の山北町と小千谷市の2産地が知られるに過ぎない。興味深いことに、本種は産地内では多産傾向が見られるが、県内で今までに得られた個体数は極めて少ない。

3. ヌバタマハナカミキリ *Judolidia bangi bangi* (Pic)

lex., 長岡市浦瀬町高津谷高原、1.VII.1989、山屋茂人
一般に温帯樹林帶上部に分布の中心を持つ種で、この種もまた県内で記録されることの少ない種である。私は湯沢町八木沢のブナ原生林内の笹上で複数採集したことがあり、樹冠がうつ閉された林内で活動する数少ない本科と考えていたが、今回、疎林中のクリの花上で得たことから、明るい環境下でも活動する比較的巾の広い生活要求を持つ種と考え方を変更しなくてはいけないように感じた。いずれにせよ、ハナカミキリ亜科の少ない長岡

にとって貴重な記録と言えるし、また、人為活動の始まる以前の長岡のファウナを示唆する証人と言えるだろう。

害虫と呼ばれるカミキリの変遷

1. キボシカミキリ *Psacothea tenebrosa* Matsushita

70年代中葉に新潟県内に侵入したキボシカミキリは平野部のイチヂクを食害しながら分布を拡大し、長岡市域でも80年代初めにはかなり広範に見られた。しかし、90年代に入ると個体数は急速に減じたようで、当館主催の県下小中高校生生物標本展の出品標本中に姿を見かけることも稀になった。

東京での私の観察ではイチヂクと桑に多く見られたが、本県では逸出したクワでは余り目に着かない。本種は関西以西に在来の個体群が知られ、前胸背側縁の黄白条は連続する。それに対し、東京に侵入した台湾からの個体群は黄白条が中央で分断するとの記述がある。長岡市域では前胸背の斑紋に2パターンが見られることから、本県への侵入ルートは糸魚川市から海岸沿いに分布を広げたものと、関東から園芸植物などにまぎれて持ち込まれたものと、2通りの方法があったと考えられる。

2. ミヤマカミキリ *Massicus raddei* (Blessig)

今から30年程以前には、本種を採集する機会は少なく、樹液に来ているものや夜燈火に飛来した個体が偶然採集されたに過ぎず、大型種では特に触角が長くカミキリムシらしいことから、盛夏には随分探策したものであった。

近年、各地で本種の大発生が報ぜられ、山辺にある高速道路のサービスエリアで、おびただしい個体が灯火に誘引されるのを見かける。長岡市域でも特にファミリーランド周辺のコナラなどの広葉樹が何者かに食害され、木くずが噴出しているのを見かけるが、犯人はこの種に負う所が大きい。本種の大発生の要因としては薪炭林の管理が昔程為されていないことで説明されるが、元來本種を見るのが少なかった中山帶のブナ原生林でも食害が見られるようで、本種の勢力が増してることも事実であろう。本種同様大型種であるシロスジカミキリも80年代に比べると明らかに見る機会が多く、大型のカミキリムシに関しては変化が見られ、今後の推移には注意が必要である。

文献

山屋茂人・片桐聰 1985：長岡市のカミキリ。長岡市立科学博物館研究報告、20：49-62。

悠久山サギコロニーのシラサギ類

動物研究室 渡辺 央

長岡市悠久山のサギ類集団営巣地（繁殖コロニー）には、ゴイサギ、アオサギに混じって3種のシラサギ類（コサギ、チュウサギ、ダイサギ）が繁殖している。これら3種が本コロニーで繁殖するようになった年代は前2種よりもかなり後年である。もともと新潟県内には少なかったシラサギ類が、目立って多くなってきたのは1970年代に入ってからと考えられるが（渡辺、1978）、県内における繁殖の記録は少なく、チュウサギとダイサギにいたっては詳しい繁殖記録さえ無い状態である。ここでは悠久山コロニーの調査の中からシラサギ類に限ってその営巣状況を報告しておきたい。

1. 繁殖開始年代と営巣数の推移

コサギは1967年から毎年続けられてきた春の悠久山探鳥会で、初めてコロニー内で記録されたのが1972年である。また、チュウサギとダイサギが悠久山で繁殖するようになったのは両種共1986年からである。その後の3種の営巣数の推移（表1）は、1989年に悠久山コロニーからゴイサギを信濃川に移動させるための追い出し作戦が行われたことによって、この年の営巣数はコサギで4巣と少なく、他の2種は営巣しなかった。コサギの営巣数は調査を開始した1976年以来大体20巣から80巣台で推移してきたが、1988年の89巣が最高である。チュウサギとダイサギについては、まだ営巣数も少なく10巣を超えないが、1989年を除けば毎年営巣が見られ、ダイサギ（図1）はやや増加の傾向すら窺われる。

表1. シラサギ類3種の営巣数の推移

	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993
コサギ	53	70	89	4	24	—		41
チュウサギ	4	10	7	0	0	—	2	3
ダイサギ	2	5	2	0	0	—	2	6

2. コロニー内の営巣分布

3種のコロニー内における営巣場所を見ると、コサギの営巣は1976年以来ほとんど変わらず、コロニー北東の一隅に集中し、後年加わったチュウサギとダイサギの営巣もまた、コサギと同じ場所に集中している（図2）。

さらに、スギ樹への巣を架ける位置をみると、3種とも比較的枝葉の繁茂する樹を選好する点も共通する。ダイサギはアオサギに近い大形のサギであるが、その営巣位置はアオサギのように樹頂部ではなく、むしろチュウ

サギ、コサギと同様に樹冠部の太い枝や、幹と枝との又の部分に多い。混合コロニーにおけるこのようなシラサギ類営巣形態は、種間関係などを探る上でも興味ある問題を含んでいる。



図1. 巢立ち前のダイサギの雛

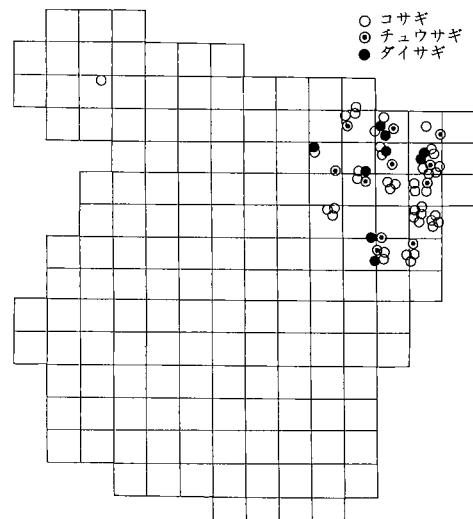


図2. コロニー内におけるシラサギ類3種の営巣場所。

コサギは1993年、他の2種は1956年と1993年の結果を合せたもの。

文 献

渡辺 央 (1978) 信濃川大河津分水の鳥類. 新潟県野生鳥獣生態研究会会報、4.

考古研究室だより　—平成5年度—

考古研究室 小 熊 博 史

博物館の考古研究室に配属となり、はや1年が過ぎようとしています。私は長岡市に入って6年目ですが、これまでの5年間は市史編さん室の職員として『長岡市史』の編さん事業に携わってきました。その間、考古学とは無縁でなかったとしても、博物館の学芸員としては、まったくの駆け出しの立場です。

学芸員は“雑”芸員といわれるとおりの、慌ただしいこの一年（平成5年度）を振り返りながら、考古研究室担当としての主な活動を報告してみたいと思います。

普及活動 一般市民を対象にした「縄文土器をつくる会」（5・6月）と「縄文の石器をつくる会」（7月）を実施しました。これは5年ほど前から始められた普及活動で、縄文土器や石器づくりを通して、縄文文化を体験的に学ぶことを目的としています。土器づくりでは、陶芸用粘土で各自に作品を仕上げてもらい、野焼きします。石器づくりでは、黒曜石や滑石を用いて、ナイフや矢じり、玉などをつくっています。参加者は20名程度で、誰でも楽しく参加できる入門的な内容です。今後は、土器・石器づくり以外の内容も加えていきたいと考えています。

また、5月～11月の間、博物館全体で実施している「少年少女青空科学教室」（小学校5・6年生対象）では、「縄文教室」を開講しました。

調査研究 当館所蔵の小瀬が沢洞窟遺跡（東蒲原郡上川村）出土遺物の研究に最も力を入れました。同遺跡出土の遺物は、縄文文化の黎明（草創期）を考える上で全国的にも極めて重要な資料ですが、発掘以来すでに30年が経過しており、今日的な視点に基づく新たな分析が必要となっていました。折しも、10月に日本考古学協会新潟大会（会場：新潟大学）のシンポジウム「環日本海における土器出現期の様相」が開催される運びとなり、新潟県内の研究者十数名と協力しながら、遺物（土器、石器、獸骨）の再検討を行いました。約1年にわたって会合を重ね、苦労もありましたが、多大な研究成果を得ることができたと思います。シンポジウムでは、ロシア極東・沿海州、中国、朝鮮など、日本海をめぐる各地域の様相の一つとして、話題を提供しました。

博物館の場合、一旦資料が収蔵されると“御蔵入り”になってしまう傾向があるので、その点に留意しながら資料の継続的な検討を進めることも必要です。その意味では、今回の再検討は収蔵資料を有効に活用していく上

で、よい契機となりました。

その他、2月に群馬県水上で行なわれた縄文土器関係の小シンポジウム（第7回縄文セミナー）では、「新潟県における縄文早期末・前期初頭の土器様相」というテーマで研究報告する機会がありました。

発掘調査 5月～8月には、市教育委員会社会教育課から依頼を受けて、市内栖吉町にある松葉遺跡の発掘調査を担当しました。これは圃場整備等の開発事業に伴う調査で、約3500m²の範囲を発掘しています。その結果、縄文時代と中世の集落跡であることがわかりました。中世の関係では、建物の柱穴や杭跡、井戸や墓穴などがあり、14～15世紀（室町時代）ころの陶磁器類、下駄や櫛などの木製品が多数出土しています。特に木製品の中には、「文明」と墨書きした木片が見つかっており、遺跡の年代や性格を考える上で貴重な資料です。

開発に伴う発掘調査は、博物館の事業とは異なる管轄ですが、その成果は長岡の考古や歴史の分野を明らかにしていく上で、欠くことのできない資料となります。展示や研究の中で大いに活用していく必要があるでしょう。

それとともに、本来は博物館主催で自主的な発掘を行うことが調査・研究の原点といえます。この点、当博物館には自主発掘の伝統もあることから、実践できるよう頑張りたいと考えています。

展示 当館職員の協力を得て、展示の改善を少しづつ行っています。博物館が柳原分庁舎に移転した後も、旧来の展示ケースを使用しているため、その老朽化がかなり進んでおり、悩みの種になっています。現在、新館構想が検討されていることもあって、大々的に展示替えはできませんが、手製のパネルやクロス張りなどで、少しでも見やすくなるように工夫しています。また、展示に関する入館者のアンケートでは、縄文土器や石器など考古分野に対する強い関心がうかがえることもあります。できるだけ多くの方々の要望に答えるべく、展示には努力していきたいと思います。

この2月からは、平成5年秋に市教育委員会の発掘調査で出土したばかりの土偶（上除町にある南原遺跡から出土したもの、長さ2.2cmで日本最小級の大きさ）を展示してみました。これまでスペースの制約もあって、新しい資料を展示する機会は少なかったのですが、今後は市内の遺跡調査の速報的な展示コーナーも設けてみたいと思います。

歴史研究室 開話

歴史研究室 広井 造

歴史研究室のあゆみ

博物館が開館したのは昭和26年8月1日のことである。それから18年後の昭和44年、当初は歴史民俗研究室として研究室はスタートした。その後、平成3年に歴史研究室として独立し、私は3人目の歴史研究室担当である。

歴史部門の資料

平成5年現在、博物館には歴史部門として独立した展示コーナーはない。平成6年度に新設する予定である。そのため博物館に歴史研究室、あるいは歴史資料があることを知る人はあまりいないだろう。

歴史研究室として担当している資料は、当然のことながら歴史資料と、加えて美術工芸資料である。その内容を具体的にいえば当館で出している「展示解説」にあるとおり、「長岡藩主の書や絵、江戸時代の武器武具、旅道中の所用具、戊辰戦争資料、「米百俵」で有名な明治の教育者小林虎三郎（病翁）の書や遺品、第二次大戦関係資料（出征・防空・空襲資料）」ということになる。

しかしこのように説明した場合、歴史研究室で一体何を研究しているのか具体的なイメージを持っていただけないだろう。そもそも歴史資料とは一体何なのだろう？

日本において歴史資料とは、一般的には考古資料・文献資料・民俗資料の3つに区分される。美術工芸資料は文献資料に近い。そして歴史資料とは、具体的に古文書や古記録、木簡、金石文などの文献資料をさす。

しかし、実際にはある資料について考古、歴史、民俗と厳密に区分できる例はほとんどなく、研究視点の置き方によって扱われ方は異なる。だから歴史資料についてはもう少し対象をひろげて次のように説明しておこう。

「歴史資料とは簡単に言えば、人間が関わったすべての“もの”である。だから何かおもしろそうな“もの”があったらぜひ教えてください。

博物館と歴史学芸員

博物館学芸員の職務は4つに大別できる。すなわち資料収集、資料の整理・保管、調査・研究、教育・普及の4つで、どれ一つをとっても大変な仕事である。そのうえ予期せぬ飛び込みの仕事も含めたら、個人の処理能力をはるかに超える作業をこなさなければならない。こうした状況から“学芸員=雑芸員”などと冗談混じりにいう人もいるくらいである。また、歴史学芸員にとっても

っとも根本的な、歴史に関する専門性を有するという必要条件できえ、達成はなかなか難しい。何しろ「人間が関わったすべての“もの”」を対象とするといつたら、人類が誕生したはるか昔から現在までの気の遠くなるような時間についての専門知識をもっていなければならぬからだ。また、人類が存在した地域をすべて対象とするということになれば、いったいどれくらいの広さを対象としなければならないのか想像を絶するところである。

歴史を勉強しよう

“歴史好き”と呼ばれる人は案外多い。自分が住んでいる身近な町の歴史から壮大な世界の歴史まで、多種多様である。歴史を勉強するということは、一面では「過去を振り返る」という側面をもっているが、この行為は人間だれしもがもっているごく自然の行為らしい。ではなぜ人間は過去を振り返るのだろうか？

この問い合わせに対するもっともポピュラーな回答は、過去を振り返ることで現在の自分、あるいはこれからの自分が持つべき立つべき視座を見いだす、というものである。つまりこうした回答は、過去に自分自身が体験したこと、あるいは自分自身が直接体験したことでなくてもその事例が参考とできる、という考え方を前提としている。

ところが歴史学においてはこのような回答に対して否定的な論者が多い。19世紀ドイツの哲学者、ウインデルバントが定立した個性記述学としての歴史学においては、歴史とは不可逆で一回性の性質をもつとしている。歴史は繰り返さないし、過去を振り返っても追体験はできないのである。このことを知っておけば前と同じ行動をとって逆に失敗することも少なくなるだろうし、その時々の状況を冷静に判断できる姿勢も身につくと思う。だから「過去を振り返ること」は決してむだではない。

例えば「昔の人はどんな生活をしていたのだろう？」という疑問をもったとする。この場合、その疑問の前提是「今の自分の生活はこうなんだけれど」というものが多い。歴史は繰り返さないから違った生活をしていたことがわかるだろう。しかし、この違いを導きだし、違いについて“知る”ところに歴史を勉強する面白さがあると思う。入り口はいくつもあるし、単純でよい。旺盛な探求心さえあれば誰でも“知る”喜びは得られる。

かく言う私は先祖（ルーツ）調べから歴史の勉強を始めた。これも単純な入り口の一つだと思う。

長岡の下駄職人

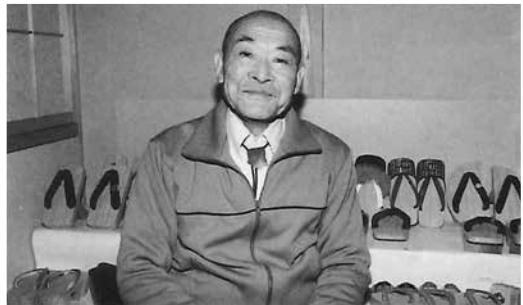
民俗研究室 山崎 進

長沢美代二さん（明治43年生）は昭和57年まで、長岡市表町で「長沢屋」という履物店を経営し、下駄職人として多くの下駄を作っていました。現在は履物店を閉じ、自宅で客の注文に応じて下駄を作っています。長岡には戦前まで、100軒以上の下駄屋がありましたが、下駄を履く人がめっきり少なくなった現在、下駄屋はなくなり、長沢さんが長岡でただ一人の下駄職人となってしまいました。次に、長沢さんの作った下駄をいくつか紹介します。

1. 雪下駄

冬季、雪道で履きます。雪が足に入らないように「爪皮（つまがい）」が下駄の前方部に付いています。更に、雪道で滑らないように下駄の歯の先にスベリドメが付いています。このスベリドメは以前は金具でしたが、今はゴム製です。デパートなど建物の床を傷付けないように工夫したものです。

雪下駄には箱下駄や二つ歯があります。箱下駄は前歯



長沢 美代二さん

にあたる台裏が箱になっていて、雪が歯に挟まるのを防ぐとともに軽量化を計ったものです。上越地方で考案され、新潟県を中心に富山県・石川県で使われています。二つ歯は2枚の歯が厚くなっていて、雪道でも沈みにくくなっています。

2. 珍しい下駄

ちょっと変わった珍しい下駄を紹介します。

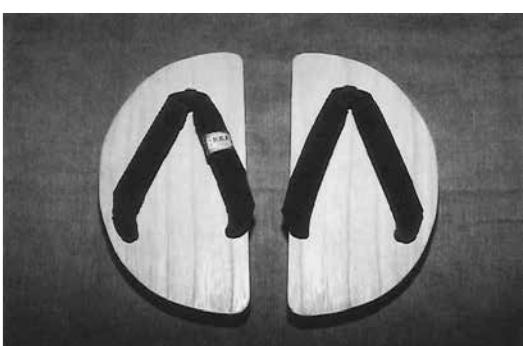
半月：円形の台を二つに分けて作った下駄で、半月の形をしています。物珍しさから履いたようです。一本歯：下駄の歯が一本しかありません。男の人が街の中で履きました。歩くには不便ですが、伊達男が履いたそうです。

ポックリ：下駄の歯がなく、大きな台の内側が削り抜かれています。歩くとポクン、ポクンという音がします。女性が履きました。

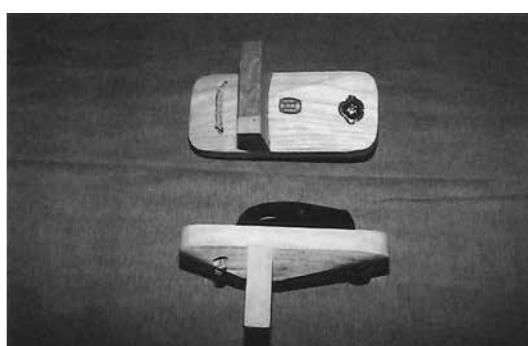
この他にもいろいろな種類の下駄があります。これらの下駄は当博物館に寄贈されましたので、当館で展示しています。ぜひ、ご覧ください。



雪下駄（箱下駄）



半月



一本歯

平成5年度事業報告

資料調査収集（市内は省略）

〔地学研究室〕

- 地質研究 東京都：1月・2月
- 植物研究室
- 分布調査 南魚沼郡湯沢町：7月・8月、南魚沼郡六日町：3月
- 研究協議 新潟市：3月（2回）
- 昆虫研究室
- 分布調査 糸魚川市：5月・3月、南魚沼郡湯沢町：6月（2回）・7月（2回）、栃尾市：6月、両津市：6月、豊栄市：3月

〔動物研究室〕

- 分布調査 加茂市：6月、北魚沼郡湯之谷村：7月、南蒲原郡中之島町：11月・12月（2回）、両津市：2月

〔考古研究室〕

- 研究協議 新潟市：3月

〔歴史研究室〕

- 史料調査 新潟市：3月、新発田市：3月、三島郡和島村：3月

〔民俗研究室〕

- 信仰調査 南魚沼郡大和町：7月、南魚沼郡湯沢町：7月

協議会・研修会・学会

- 新潟県博物館協議会総会 4月28日 新潟市（参加：西山館長）
- 新潟県民俗学会総会 5月16日 新潟市（参加：山崎学芸員補）
- 北信越博物館協議会総会 6月3・4日 長野県大町市（参加：西山館長）
- 新潟県博物館協議会運営研究会 6月7・8日 両津市（参加：山崎学芸員補）
- 新潟県考古学会 6月20日 新潟市（参加：小熊学芸員）
- 新潟県文化財指導者講習会 8月26・27日 新潟市（参加：山崎学芸員補、広井学芸員補）
- 日本民俗学会年会 10月2・3日 栃木県栃木市（参加：山崎学芸員補）
- 新潟県博物館協議会学芸員等職員研修会 10月6・7日 石川県金沢市（参加：西山館長、広井学芸員補）
- 日本考古学会新潟大会 10月16・17日 新潟市（参加：小熊学芸員）
- 新潟県民俗学会共同採訪 11月13・14日 糸魚川市

（参加：山崎学芸員補）

- 日本史研究大会 11月20・21日 京都市（参加：広井学芸員補）
- 日本鞘翅目学会大会 11月21日 東京都（参加：山屋主任）
- 繩文セミナー 2月5・6日 群馬県利根郡水上町（参加：小熊学芸員）
- 自然保護講座 2月19・20日、東京都（参加：西山館長）
- 日本地質学会総会・討論会 3月29日 東京都（参加：加藤主任）

普及活動

- 地層と化石の観察会 5月23日、浦瀬町、参加者18人。
- 鉱物采集会 9月26日、岩室村間瀬、参加者8人。
- 雪を調べる会 3月6日、長岡雪氷防災実験研究所周辺、講師：同研究所主任研究官 小林俊市、納口恭明先生、参加者13人
- 早春の植物を観察する会 4月29日、栖吉町周辺、講師：植物研究家 坪谷富男先生、参加者20人。
- 親子の夏の植物観察会 7月25日、鶯巣町定正院、参加者19人。
- キノコを調べる会 10月3日、東山ファミリーランド、講師：長岡キノコ同好会会員 佐藤勝得先生、参加者92人。
- キノコの展示会 10月4・5日、科学博物館展示室、講師：長岡キノコ同好会事務局長 原信高先生、入場者168人。
- 雪国植物の越冬を調べる会 3月27日、雪国植物園（雲出町）、講師：植物研究家 関繁雄先生、参加者23人。
- ギフトショウ探蝶会 4月18日、成願寺町周辺、講師：越佐昆虫同好会副会長 桜井精先生、参加者21人。
- 雜木林の昆虫観察会 5月23日、乙吉町、講師：越佐昆虫同好会副会長 桜井精先生、参加者26人。
- 親子昆虫標本づくり教室 7月31日・8月1日、東山ファミリーランド、参加者39人。
- 野鳥相を調べる会 調査地：大積灰下町～赤池周辺 4月25日、参加者33人。5月23日、参加者23人。6月

27日、参加者32人。7月25日、参加者14人。8月22日、参加者16人。9月26日、参加者16人。11月28日、参加者7人。

◦野鳥集会と探鳥会

5月8・9日、大積灰下鉱泉～赤池周辺、講師：塩沢小学校校長 井口忠先生、参加者37人。

◦信濃川バードウォッキング

5月16日、信濃川左岸（長生橋～長岡大橋）、参加者41人。

◦悠久山探鳥会

11月14日、悠久山公園周辺、参加者18人。

◦冬鳥さよなら探鳥会

3月13日、信濃川（長生橋上流）、参加者25人。

◦縄文土器をつくる会

5月22・23日（造形）・6月12日（野焼き）、深才連絡所及び藤橋歴史の広場、講師：陶芸作家 今千春先生・今葉子先生、参加者24人。

◦縄文時代の石器をつくる会

7月10日、藤橋歴史の広場、参加者12人。

◦第42回生物標本展示会・第35回自然科学写真展示会

10月14日～10月17日、会場：厚生会館中ホール、出品者数延274人、出品点数7,729点、入場者数延1,822人。

◦第30回県内小・中・高校生生物研究発表会

10月17日、会場：厚生会館第1小ホール、発表：小学生の部9題、高校生の部4題、入場者数延106人。

◦科学博物館講演会

8月8日、会場：中央公民館大ホール、演題：昆虫のひみつ、講師：神奈川県立博物館主任学芸員 高桑正敏先生、昆虫研究室の報告：カブトムシとクワガタムシ、当館主任 山屋茂人、入場者55人。

◦植物標本の名前をしらべる会

8月26日、中央公民館工作室、参加者26人。

◦昆虫標本の名前をしらべる会

8月30日、中央公民館302教室、参加者17人。

青少年科学活動促進事業

郷土の豊かな自然、太古の文化などを科学的見地から見つめ直すことによって、青少年の科学する心、郷土を愛する心を育むことを目的に実施した。

◦少年少女青空科学教室

5つの教室を開設し、対象は小学5・6年生とした。

教室名	人数	期間	回数
地学教室	10人	5月～10月	9回
緑の科学教室	9人	5月～10月	8回
昆虫科学教室	10人	5月～10月	8回
野鳥科学教室	7人	5月～10月	10回
縄文教室	11人	5月～10月	9回

◦少年少女科学フェスティバル

11月7日、中央公民館大ホール、参加者45人。

学習成果の発表、作品展示、閉講式。

総合博物館建設のための事業

◦長岡市立総合博物館（仮称）展示委員会の設置

◦顧問（敬称略）

氏名	職名
杉山二郎	佛教大学教授

◦委員（敬称略）

	氏名	職名
地学	納口 恭明	長岡雪氷防災実験研究所 主任研究官
	小林 巍雄	新潟大学理学部教授
植物	石澤 進	新潟大学理学部助教授
	小島 誠	新潟大学農学部教授
昆虫	○樋熊 清治	新潟県自然環境保全審議会委員
	遠山富士雄	柄尾市立刈谷田中学校教頭
動物	村山 均	にいがた貝友会会長
	金安 健一	出雲崎町立出雲崎中学校教諭
考古	小野 昭	新潟大学人文学部教授
	中島 栄一	新潟県立水原高等学校教頭
歴史	金子 達	県立新潟西高等学校教諭
	土田 隆夫	長岡市郷土史料館嘱託員
	稻川 明雄	長岡市市史編さん室室長補佐
○吉沢 俊夫		長岡郷土史研究会会长
民俗	駒形 駿	新潟県文化財保護審議会委員
	高橋 由雄	新潟県民俗学会会員
	鈴木 昭英	長岡市郷土史料館館長

◎委員長、○副委員長

◦委員会の開催 10月28日全体会 中央公民館 401、403教室

◦資料調査・収集

地学部門 長岡市内：8月・3月（2回）、三島郡越路町：12月、新井市：3月（2回）

植物部門 岩船郡朝日村：10月、茨城県つくば市：2月

昆虫部門 中頸城郡妙高高原町：6月・7月、新井市：11月

動物部門 新井市：11月、新発田市：11月、十日町市：2月、小千谷市：2月、長岡市内：3月（2回）

民俗部門 小千谷市：9月、上越市：10月、長岡市内：3月

歴史部門 新発田市：2月、福島県福島市：2月・3月

。先進博物館視察

7月13日黒部市吉田科学館、7月14日富山市科学文化センター、9月30日柏崎市立博物館

出版物

館報 (N K H)

- ・64号 生物研究発表特集 700部
- ・65号 部門別特集 700部
- 博物館研究報告 第29号 500部
- ・浦瀬川流域の古地磁気(3) 加藤正明
- ・新潟県のトリカブト属植物 伊藤至
- ・信濃川の河辺植物(13) 西山邦夫・荒井キミ
- ・コガネムシ3新種の記載 三宅義一・山屋茂人
- ・北朝鮮平安北道天摩山のオサムシ

井村有希・山屋茂人

- ・粟ヶ岳の鳥類 渡辺 央
- ・中世における栖吉村落の研究 広井 造
- ・新津ごぜ 鈴木昭英
- ・赤池伝説の解析 山崎 進
- ・新潟県の旧石器・縄文草創期 小熊博史・立木宏明
- 博物館資料シリーズNo.4 世界のオサムシ 1,000部

主な資料寄贈 (敬称略)

地学資料

- 北魚沼郡広神村白岩層産植物化石 2点
- 三島郡三島町 奈良場 勝
- イグアノドン椎骨化石の一部 1点
- 群馬県前橋市 野村正弘

歴史資料

- 明和7年4月高札 1点 東京都秋川市 堀 正坦
- 麸の炭化物ほか6点 新発田市 丸山睦子

民俗資料

- 墨壺ほか54点 長岡市才津町1丁目 吉田美代
- 箱下駄ほか21点 長岡市大山2丁目 長沢美代二
- ズレほか5点 長岡市村松町 小幡 等

雪下駄 1点 長岡市金房2丁目 小柴嘉代

歴史民俗資料

「日本歴史地名大系新潟県の地名」ほか40冊

長岡市金房2丁目 小柴五郎

第壹期種痘證ほか16点 長岡市村松町 栗木敏夫

学芸員名簿

- | | |
|---------|--------------|
| 館 長 | 西 山 邦 夫 (植物) |
| 副 主 幹 | 渡 辺 央 (動物) |
| 主 任 | 山 屋 茂 人 (昆虫) |
| 主 任 | 加 藤 正 明 (地学) |
| 学 芸 員 | 小 熊 博 史 (考古) |
| 学 芸 員 補 | 山 崎 進 (民俗) |
| 学 芸 員 補 | 広 井 造 (歴史) |

平成5年度月別入館者数

月別	個 人		団 体		資料照会		計	
	大人	子供	団体数	大人	団体数	子供		
5. 4	364	162	0	0	10	569	44	1,140
5	531	249	4	112	9	724	41	3,1,660
6	296	134	1	41	6	581	30	0,1,082
7	284	158	4	79	3	92	19	1,633
8	878	569	3	55	0	0	70	48,1,620
9	277	126	1	140	3	277	58	0,878
10	686	127	2	129	1	18	65	1,1,026
11	292	98	0	0	2	60	53	0,503
12	147	61	2	102	0	0	43	0,353
6. 1	174	67	0	0	0	0	39	0,280
2	217	59	0	0	0	0	45	0,321
3	490	142	0	0	1	13	39	0,684
合計	4,636	1,952	17	658	35	2,334	546	54,10,180

あとがき

今年度は3名の学芸員が博物館に新たに配属となりました。そこで、それらの人たちの紹介という意味も含めて、今号は従来とスタイルを変えてみました。N K Hの奇数号は、今まで各研究室交代で調査研究や普及活動の成果を報告してきましたが、今回は各研究室の担当者が1ページずつ執筆しています。その結果、バラエティに富む内容となりました。

これからも博物館とN K Hをよろしくお願いします。

N K H (長岡市立科学博物館報) No.65

平成6年3月31日発行

編集・発行 長岡市立科学博物館

〒940 長岡市柳原町2-1

印 刷 所 糸北越時報社

長岡市住吉2-5-13